

学校名：岩手県立大船渡高等学校定時制

## I 学校や地域の状況

本校は高台にあり、震災による津波の直接的な被害は免れたものの、定時制在籍生徒の約半数が自宅半壊、全壊等の被害を被っており、未だ仮設住宅で生活している生徒も数人いる状況である。震災から7年が経過し、まだまだ震災の爪跡は残るものの、着実に復興が進み、穏やかな生活を取り戻しつつある。本校定時制では、備蓄や防災マニュアル等の整備が進んでいる一方で、生徒の実態に即した復興教育は十分とは言えない。

## II 実施期日

震災学習列車：平成31年2月15日（金）

## III 実践内容

3つの教育的価値【いきる】【かかわる】【そなえる】が育成できるような活動になるよう、震災学習列車を中心に事前・事後学習を設定した。

### (1) 事前学習【そなえる】

①三陸鉄道が復興するまでの道のりに関する展示を行い、三陸鉄道への興味関心を喚起した。



【三陸鉄道に関わる展示の様子】

②総合的な学習の時間を用いて、日本赤十字社の青少年赤十字防災教育プログラムから地震災害・津波災害についてのDVDとワークシートを用いて、災害時の行動について学んだ。また、災害に備えるために普段からどのような心構え・準備が必要かをペアワークで話し合った。

### (2) 震災学習列車【いきる・かかわる】

三陸鉄道南リアス線盛駅～釜石駅間を乗車し、三陸鉄道社員の熊谷松一氏より説明を受けた。

○参加者 生徒 12名、教職員 9名。

1 学年4名（震災当時小2）

2 学年7名（震災当時小3、小5）

3 学年1名（震災当時小4）

### (3) 事後指導【いきる・そなえる】

防災士から災害時の心構えや生き抜く力をどう身につけるかについて講話いただいた。津波の高さ15mが校内ではどの位置になるのかを体験し、どのように逃げるかを考えさせた。また、校内の備蓄品がどこにあるかを確認し、有事の際は冷静に行動することを学んだ。

## IV 生徒・教職員の感想

○三鉄に乗る機会はあまりなく車での移動が多いので、高い所からの景色が新鮮で教室でただ座ってお話を聞くよりも自由な所も多く、体験をしながらだとより話を聞きやすいと思った。印象に残っている話は綾里湾でおきた大津波の話である。昔、そんなに大きな災害があったことも知らなかったので、3.11のことでだけでなく地区ごとの歴史や文化の話も多く聞くことができ嬉しかった。トンネルの造りも普段は見たり調べたりすることがないので少しでもそういう事を知っていれば列車に乗る時に楽しいだろうと思った。

（1年女子）

○私は毎日通学のために三陸鉄道南リアス線を利用しているが、普段利用していても気がつかない点や3月11日当日の三陸鉄道の状況など、あまり聞くことができない話を聞くことができた。それを聞き私もこの3月11日に起きた出来事を忘れさせてはならないと強く思った。（2年男子）

○震災学習列車に初めて乗った。大船渡に住んでいるけど知らなかった事がたくさんあった。特にすごいと思ったのが津波に襲われても生きていたポプラの木である。自然災害にあっても耐える事が出来るのは自然の物だけなのだと感じた。（2年女子）

○南リアス線が海拔10m以上のところにつくられていて、その理由が明治時代にあった津波対策のためということを知った。震災については知っている

こともあったけれども、ポプラの木があったことは知らなかった。列車のことも新しくなっていて支援を受けていたのだなと思った。体験したことを忘れないようにしていきたいなと思った。(2年女子)

○今回の震災学習列車では三陸鉄道南リアス線が東日本大震災の際に受けた被害や支援などについて教わった。最初に聞いていて驚いたのは南リアス線が通っている線路が海拔の平均 10m以上の位置にあるのは津波対策であり、防潮堤の役割を担っていることだ。そして三陸駅の近くには津波を被りながらも今でもしっかりと生きている「奇跡のポプラ」があるのにも驚いた。(3年男子)

○震災の状況とその対策について三陸鉄道のことだけではなく町づくりの在り方や防潮堤の構造等詳しい説明をしていただいた。海産物等豊かな恵みをもたらえる一方で震災という大きな被害も与える、この三陸の海との共生を考えていくことが考えさせることが大きなテーマになると思った。(教職員)

## V 取組の成果と課題

### 1 成果

三陸鉄道が海拔 10m以上に線路がある理由が防潮堤の役割といった津波対策であることを知り、今回の知見を後世に伝えたいという気持ちが強くなった生徒が多く見受けられた。また、綾里地区では津波に対する防災教育が進んでおり、震災の日は泣きながら綾里駅を目指して走って逃げてきたというような説明を実際にその綾里駅で聞くことで、生徒の表情が一瞬で大きく変化し、真剣に話を聞いていた。改めて三陸鉄道が被災地において果たす役割の大きさを理解できたようであった。三陸駅では、震災を生き残った『ど根性ポプラ』を知り、植物のたくましさを実感していた。

地元の生徒がほとんどであるが、三陸鉄道も被災地域も身近な存在でありながら今回初めて知ったことが多く、事実を事実として真摯に受け止めるとともに、地域復興に向けての意識を高めていた。

また、震災学習列車を通して、震災時の状況、災害に対する普段の心構えの重要性、クウェートをはじめとする世界からの支援、植物の生命力、復興の進捗状況等を学び、この体験をこれからの人生に生かしたい、震災を風化させたくないというような生徒の意識の変容が見られたことが大きな収穫であった。



【車内で説明を聞いている様子】



【車内で熱心にメモを取っている様子】



【三陸駅で黙祷している様子】

### 2 課題

震災学習列車が短時間で生徒の意識の向上につながる意義深い企画である一方、本校では全学年参加であるため、毎年の実施は難しい。次年度以降は復興教育にどう位置付けるかを念頭におき、実施時期・回数(4年に一度)等の検討とワークシートの工夫が必要である。